

その他

## 看護技術論の新たな展開に向けて

Leading to the New Developments in the Theory of Nursing Art

吉浜 文洋

Fumihito YOSHIHAMA

### 抄 録

川島みどりは、武谷三男の技術論に依拠して、看護技術論を展開している。技能の技術化による看護技術の開発、技術の技能化のための教育方法などの理論的枠組みの設定のためには看護技術論が必要である。川島の看護技術論の再構築を試みるために、武谷技術論を基礎に、ショーンの「行為の中の知」、野中らの「組織的知識創造理論」の理論を整理した。

武谷は、どの技術にも一定の技能が存在していて、実践は技術と技能の統一を通してなされんとする。「技術的合理性」の観点からしか専門職の実践をみていない大学等の知の在り方を批判するショーンは、不確実性の中での専門職の実践は、暗黙知である「行為の中の知」が重要な役割を果たすとする。野中らは、暗黙知と形式知の知識変換を通して、知識創造のスパイラルが展開されることを構造化して示している。

技術論（武谷）、行為の中の知（ショーン）、組織的知識創造理論（野中ら）に共通するのは、専門職の実践における暗黙知の重要さの指摘である。看護の領域でも、実践の中の暗黙知に着目した看護技術論を構築することで、「技術的合理性」モデル優位の現状を変えていけるのではないかと考えられた。

**キーワード** ■看護技術論、武谷技術論、技術と技能、行為の中の知、組織的知識創造理論

### はじめに

法的には保健医療の分野において看護が担う役割は「療養上の世話」「診療の補助」である。この役割を担うためには看護技術が必要とされる。看護技術の対象への適用が看護実践であり、

看護技術とは何かを問うことは、看護実践そのものを問うことでもある。

日本看護科学学会は、看護技術を次のように定義している。「看護技術とは、看護の問題を解決するために、看護の対象となる人々の安全・安楽を保証しながら、看護の専門的知識に基づいて提供される技であり、またその体系をさす。看護技術は、目的と根拠をもって提供されるものであり、根拠に基づく専門的知識は熟練・修練により獲得され伝達される。また、看護技術は、個別性をもった人間対人間の関わりの中で用いられるものであり、その時の状況（context）の中で創造的に提供される」<sup>1)</sup>。

この定義は、技術と技能の違い、あるいは暗黙知と形式知の違いについて十分検討されていないが故と思われる一貫性のなさがある。看護技術は果たして目的はともかく、「根拠をもって提供される」とためらいなく言っているのか。「根拠に基づく専門的知識は熟練・修練により獲得され伝達される」のか。問題は、「根拠」をどう理解するかである。定義の後段で述べられる「個別性をもった人間対人間との関わり」、「その時の状況（context）の中で創造的に提供される」と「根拠」との関係は、どう考えればいいのか。「根拠」と「実践」の関係について、この定義から整合性を見出すのは難しい。「根拠」と、その臨床での適用である実践の関係を明確にしなければ技術の定義としては不十分さを免れないだろう。

ショーンの「行為の中の省察（reflecting-in-action）」「行為についての省察（reflecting-on-action）」「行為の中の知（knowing-in-action）」<sup>2)</sup>等の概念は、専門職の実践についての理論として看護領域においてもよく知られている。また、ナレッジマネジメントも看護の領域に浸透しており、野中らの「組織的知識創造理論」<sup>3) 4)</sup>に関心を持つ看護関係者も増えてくるだろう。この経営学の理論は、「形式知（explicit knowledge）」と「暗黙知（tacit knowledge）」の相互作用と深化を論じていて、ナレッジマネジメントの基礎的な理論として知られている。ショーン、野中らの理論は、実践における知のダイナミズムを扱っている。両者は、技術論の範疇の理論であり、とりわけ技術と技能の関係を説明する理論とみなせる。前述の看護技術の定義でいえば「根拠」と「創造的提供」の関係についての理論ということになる。

看護界においては、技術論をテーマに論陣を張ってきた論客の一人に川島みどりがいる。川島は、1970年代から武谷三男の技術概念に依拠しつつ、看護の技術化について活発に論じている<sup>5) 6) 7) 8) 9) 10)</sup>。その骨子は、以下のとおりである。

- ・対象に働きかけて目的とした変化が起きたとすればその看護行為は法則性に則った有効な活動だったといえる。この法則性は必ずしも科学の法則ではない。
- ・法則性に則った活動には、技能と技術の2つの形態がある。
- ・看護実践のレベルを向上させるには、技能から技術へ、技術から技能へという法則性の言語化、身体知化の循環が必要である。

川島の問題意識を引き継ぎ、新たな看護技術論の展開へ向けて、ショーンの「反省的实践家」理論、野中らの「組織的知識創造理論」を読み込むという基礎的作業を試みたのが本論考である。

## I. 武谷技術論の概要

戦後すぐに発表された「技術論—迫害と戦いし知識人にささぐ—」において、武谷は(1)従来の技術概念の批判(2)日本技術の欠陥(3)技術論の基準について(4)実践の原理としての技術(5)技術と技能(6)新たな技術概念として技術の「本質論」を展開している<sup>11)</sup>。川島は、武谷技術論に出会い、触発されて看護技術論を構想する。

ここでは、川島の看護技術論を理解する上で確認しておく必要のある(4)(5)(6)の項について概略をまとめておく。

(4)「実践の原理としての技術」(5)「技術と技能」、は実践の原理としての技術を論じた項目である。人間の実践は、客観的法則性を無視しては成り立たない。実践の原理について考えると、「その実践がいかにして可能であり、いかにして行われるか」について「実践を内面から」みることである。「(実践を)内面から、その実践がいかにして可能であり、いかにして行われているかについて、その原理についてみる」とのセンテンスは、武谷技術論の紹介の際よく引用される。武谷技術論理解のカギの一つが、実践を「内面から」見ようとする姿勢といえよう。

人間の実践を「内面から」みるとは、まず、実践をその主体、実践者に着目して理解することである。そして、客体としては捉えられない、外へ露わになることのない変化をみようとする姿勢を持つことだ。このように実践の動機、実践に活用されている身体知や暗黙知、働きかけたことによって引き起こされた客観化して示すことのできない変化などに注目することを指して武谷は「内面から」と表現している。

人間の実践を「内面から」みるとき、浮かび上がってくるのが技術と技能の区別と、両者の関連である。次に述べるように技能は技術へ転化していく。そのプロセスを理解するには実践を「内面から」みる必要がある。技術と技能の差異を整理すると表のようになる。

	技術	技能
基本的特性	客観的なもの	主観的心理的個人的なもの
獲得方法	知識の形で伝達が可能	熟練による

技術には、技能がつき従っているので、実践は、技術と技能の統一を通してなされる。その際、主観的な技能は客観的な技術の中に解消されるが、技能は消失するのではなく、新たな技

術には新たな技能が必要とされる。この武谷の技術と技能の関係についての洞察は、野中らの「組織的知識創造理論」の萌芽を思わせる議論の展開となっている。このように技術と技能は循環しながら、より質の高い技術へと発展していく。同じ労働が繰り返されるような大量生産は、労働の中の技能が技術に組み込まれ、そこに新たな技能が生まれ次々技術化されるという循環過程として進展していくならば、製品の質の向上をもたらすと武谷は述べている。これは、1980年代、日本の自動車生産現場から始まった改善運動に他ならない。敗戦前夜に特高調書として書かれた武谷技術論は、高度成長期の日本の生産現場の品質管理活動を見通しているかのような論理となっている。

川島は、1965年、武谷技術論に出会い、看護技術についての基本的な考え方を整理できるようになったと繰り返し述べている。なかでも、技能と技術の区別、その循環に示唆されるものが大きかったようだ。「法則性」が「客観的」なものであるかどうかが技能と技術の差異である。個人の技に留まっている技能から「客観的法則性」を取り出すこと＝言語化することで、技術化が可能になる。

さらに、技術を確かなものとして身につけるには、「体に覚えてもらう」が必要になるが、これは、技術を技能に移し替えることに他ならない。「技術は知識で伝達し得るゆえに『行為を可能にする原理』なのである。ただしここで終ってはならない。これをスムーズに実践に適用するためには、個人の技（技能）に解消していかなければならない」と川島は、技能－技術－技能と循環していくプロセスに着目している<sup>12)</sup>。

(6)「新たな技術概念」において、武谷は「技術とは人間実践（生産的实践）における客観的法則性の意識的適用である」と、後に「労働手段説」に対して「適応説」と呼ばれることになる「技術の唯物弁証法的規定」を提起する。

この技術概念は「人間の行為における法則性の適用」が技術であるとしている。したがって「客観的法則性」「意識的適用」をどう理解するかが武谷技術論理解の鍵となる。「認識という科学よりも先に技術が存在していた」ことに武谷は注意を促す。近代においては、科学と技術は不可分の関係にあり、「科学技術」と呼ばれる。しかし、歴史的には、まず人間生活に必要なものを生産する技術があり、その原理的理解、理論の解明は技術の開発後になされてきた。科学的な理論がまずあり、その理論に基づく技術開発がなされるようになったのは、20世紀に入ってからだといわれている<sup>13)</sup>。人類は、科学的認識が十分とは言えない未開時代から、石器、陶器、鉄器と道具類を開発してきたことを考えれば、まず技術があったことは自明なことといえる。

したがって、客観的法則性＝「科学的」認識は、厳密さを要せず、ある目的を達するための仮説として意識されていけばよいことになる。見通しを示せばいいのである。想定していた通りの結果となるか、試行錯誤的な経過を辿るかは、実践してみないとわからない。このように、実践を通して確からしさを確認するしかない実践場面全体での法則のありようを表現して



いるのが「客観的法則性」という言葉である。

主観的個人的な「技能」と客観的「技術」の対比でいうと、技能においては、「客観的法則性」は他者に言葉として伝えられるほど明確にはなっていない。その技能を有する人自身も説明は困難なのであるから、法則性の「意識」は明瞭とは言えないだろう。「意識」することは、知的な活動であり、それには言葉が必要である。説明する言葉を持たないということは、何らかの法則性は手ごたえとして感じていても、明瞭さを欠く法則性であることは否めない。一方、技術の場合は、言葉で説明することができ、伝えることができる。言葉に表すことは、客観的法則性を「意識」することである。それゆえ、「実践に意識的に適用」することができるのである。

「意識的」について武谷は、動物の行動は本能を基盤としているのであるからその行動は、無意識的であり、意識的である人間の行動と対照的であると、ごく簡単に触れているだけである<sup>14)</sup>。人間の行動も危険を避ける反射的行動のように無意識的である場合もある。しかし、対象に変化をもたらすために働きかける目的を持った行動が「技術」や「技能」であるから、そのような行動は、程度の差はあるにしても「意識的」であることなしには不可能だろう。

技術は「客観的法則性の意識的適用」であるとの武谷技術論のキーワードは、以下のように要約できる。

客観的：言語により伝達可能な程度に明瞭な、個人の考え方に左右されない物事のとらえ方

法則性：目的とした変化を生み出す働きかけを可能にする自然的必然性

意識的：動物とは異なる本能的ではない人間にのみ可能な対象へのアプローチ

適用：目的達成のための実践であり、対象への意図を持った能動的な関わり

## Ⅱ. 科学と技術

武谷は、客観的法則性を「認識するという立場」が科学であり、「適用という立場」が技術である<sup>15)</sup>と両者を明確に区別している。看護は、アートか、それともサイエンスなのかとの問いが立てられることがある。結論は、アートでもあり、サイエンスでもあるとされることが多いかもしれない<sup>16)</sup>。それを最も端的に表しているのが、日本看護技術学会の英語表記、Japanese Society of Nursing Art and Science だろう<sup>17)</sup>。

この学会の設立趣旨として二つのことが挙げられている。「看護職者らが行っている様々な技術について、その効果とメカニズムを科学的手法を用いて明らかにする」とことと「経験的知識を発掘してその根拠を探索すること等により、さらなる看護技術の開発を目指す」ことである。この背景には、客観的であり科学的である技術に価値をおく現代社会においては、看護職の説明責任として「積み重ねてきた看護技術の効果と根拠を明確に示すこと」が求められているとの時代認識がある。

また、学会設立の目的としては、「看護学の学術の発展」への寄与、「看護実践の向上」への貢献が挙げられている。看護は科学（science）であるとの立場からは「看護学の学術の発展」が目的となる。看護は、技術（Art）であるとするなら「看護実践の向上」を目指さなければならない。この学会は、Art and Science の二つの焦点を持つ学会なのである。

技術は科学に先行することは明かだ。火を手にいれ、道具を使いこなすところから人間の文化が始まったといわれる。「物理的、生物的環境に客観的变化をもたらす」には技術が必要であった<sup>18)</sup>。体温を調整するには衣類が必要なように、生物としての人間の限界を超えるには物を作る技術が必要とされたのである<sup>19)</sup>。

大輪は、科学と技術の違いについて、以下のように説明している<sup>20)</sup>。科学とは「すでに存在しているものまたは現象の中の真理、またはそこに働く普遍的な原理を探求する」ことである。それに対し技術は「神が作らなかったものを作ること」「自然に対して何か手を加えたいという意志が働くこととそれを実行に移すこと」をいう。科学は物を作らないが言葉を必要とする。技術は物をつくる。言葉はいらない。製品が全てである。技術は寡黙である。このように科学と技術は、本来別物であると大輪は印象深く表現している。現代では科学技術とよばれていて技術は科学の応用であると言われることもあるが、歴史的にみるとこのようなとらえ方は誤謬といえる。技術は、必ずしも科学の成果を活用したものではない。

大輪は、「もの作り」の技術について論じていて、医療・看護、教育、福祉などの対人援助の技術については触れていない。しかし、生産的技術だけでなく、サービス提供の技術を含め、何かを実現し、目的を達成するための「欲望を持った行為」が技術であることは確かだ。物事の成り立ちを解明し、ものの本質に迫ることを目指す科学とは、根本的に異なる。

看護技術論は、技術と科学の関係を整理することが起点となることを武谷、大輪の議論は示唆している。日本看護技術学会の技術を「Art and Science」とした英語表記。この and で結ばれた技術と科学の関係は、どのようなものか。このことは単なるネーミングの問題にとどまらず、看護技術の本質をめぐる論議とならざるをえないだろう。

「看護が実践であれば、看護実践というのは当然技術論がなければ成り立たないと思います。ところが今の看護界には、看護は究極のところ『技術』なのか『科学』なのか、というところの論争が欠けているのです。しかも、『看護は科学だ』という人が圧倒的に多い。看護はもちろん科学的に考えなければいけないのですが、看護というのは『科学』になりえないと私は思っています。看護は最終的には技術ですから、その技術を教えなければ実践はできない。」<sup>21)</sup>

看護技術を「Art and Science」とする立場からは、川島のこの問題提起にどのように答えるだろうか。

### Ⅲ. ショーンによる技術的合理性 (technical rationality) モデル批判

ショーンの「The Reflective Practitioner」は、専門職として問題解決場面においてなされる知的作業とはどのようなものかをテーマとしている。専門職の実践について建築デザイン、精神療法、工業デザイン、都市計画、組織マネジメントなどに携わる実践家のケーススタディを通して明らかにしたのがこの著書である<sup>21)</sup>。このショーンの著書が提示している問題は、技術論の範疇に入ると考えてよいだろう。

大学に代表される科学志向、学問志向に批判的なショーンは、この著書を「技術的合理性モデル」への批判から展開する。専門職の実践は、問題を解決し目的を実現するために、科学的研究が導き出した知識や理論の適用を通してなされるとするのが技術的合理性モデルである。

ショーンは、「大学という制度がかかわるのは、ある<特殊な>認識論や知識観であり、それは実践的（実務的）」な能力やプロフェッショナルの<わざ artistry>をあえて無視することを促す知識観になっている」<sup>22)</sup>との大学批判をこの著書の冒頭に記している。そして、大学における「科学や学問といった『ハード』な知」偏重を批判し、実践者の「<わざ>や表に出ない意見などの『ソフト』な知」との間に架橋する必要があると問題提起する。

「一方に、実践者は研究をベースとした理論と技術を効果的に活用できるとする、いわば地質の硬い高地があり、他方には技術的解決が不可能なほど『乱雑』な状況になっているぬかるんだ低地もある」<sup>23)</sup>とショーンは、大学に代表される研究機関を硬い地質の「高地」、実践の現場を「ぬかるんだ低地」というメタファーを使って表現する。高地にいる専門家は、「厳密性」を求める。しかし、低地の専門職にとっては、それより「適切性」が重要である。実践の場では、好ましい変化＝適切性がもたらされればよいのであって、厳密な論理性は必ずしも必要とされていないと考えているのである。

近代の専門職にとって実践とは「技術的合理性」の適用のことと考えられてきた。しかし、このモデルによる専門職の活動は、1960年代ごろから限界が意識されるようになってきたとショーンは指摘する。専門職は、「複雑性、不確実性、不安感、独自性、価値観の衝突」<sup>24)</sup>等の現実を抱え込んだ中で問題解決を図る。例えば、肥満、高血圧、糖尿病のような生活習慣病的な健康上の問題状況があっても、食生活、運動不足、ストレスの何を焦点として解決すべきなのか。取り組むべき課題を設定しようにも、予測を超えたデータの変動、職業上の制約、対象者の価値観など独自性が絡むと、解決の枠組みを設定することからして容易ではない。

専門職の知識を厳格に実践に適用しようとする、その知識が守備範囲としている領域に限定した問題解決が図られることになり、本来の課題は、無視されることもあり得る。「医師は標準的な技術を、医学書にない症例に適用することはできない」<sup>25)</sup>。「技術的合理性」のみでは、問題は解決できないのである。一方、問題解決に有効な実践的な知識や対処法があっても、それは「技術的合理性」モデルを信奉する大学の主流を占める実証主義者にとっては、科学的

専門的知識ではないとされることがあるとショーンは述べている<sup>26)</sup>。

「実証主義者」は、自然の法則を「観察された現象を説明するために創り出された構成物」と考える。実証主義者である科学者は、「見ることのできない世界の抽象的モデル」をつくり、実験によってこのモデルの妥当性を検証する。どの説明理論が妥当性を持つのかは、実験によって選ばれる。このような実証主義者の抽象的説明モデルでは実践は十分に扱えない。彼らにとって、実践的知識は、科学的知識とは別の、単に目的を達成するための手段についての知識でしかない。複雑な現実問題に対処するために活用された臨床の知恵のような実践的知識は、専門的知識に基礎をおいたものではないと実証主義者はみなすのである<sup>27)</sup>。

ショーンの「技術的合理性」モデルへの批判は、武谷技術論の立場からはどのように考えられるか。武谷は、「科学は認識であり技術は適用である」<sup>28)</sup>と、科学と技術の相違を明確にしている。「客観的法則性の意識的適用」が技術である。しかし、ここでいう「客観的法則性」は、科学的な明晰さを要求するものではない。何らかの法則性が意識されていればよいと柔軟に解釈すること求めている。客観的法則性は、そのような冗長性のある表現なのである。ショーンの「技術的合理性」モデル批判は、「厳密性」を追求する科学的認識のみで専門職の目的とした実践が行えるわけではないとする。武谷の技術規定は、技能的な現場の知を含んだ法則性を想定をすることで、ショーンの批判を免れているといえる。「技術的合理性」は武谷のいう「客観的法則性」の一部を構成するが、完全に重なるのではない。

#### Ⅳ. 暗黙知と技能

「技術的合理性」モデルの限界を超える実践者の知の在り方を追求したショーンが提唱するのが「行為の中の省察（reflection-in-action）」である。デューイの弟子を自認するショーンは、「私は、デューイの『反省的思考 reflective thinking』の代わりに『反省的实践 reflecting-in-practice』を私のキーワードとして、デューイの『探求の理論』の私バージョンを作り上げようとしてきたといえるだろう」<sup>29)</sup>と述べる。

デューイは、これまでの行為が通用しないために立ち止まらざるを得ない不確定状況を確定状況に変化させるのが問題解決であるとして、そのプロセスを示した。この反省的思考あるいは探求とも呼ばれる問題解決の思考（行動）に対し、実践に着目して目的を実現するための行為における知の様相を明らかにしたのがショーンである。ただ、全てがデューイから受け継いだものではなく、新たに付け加えたものもあると述べている。暗黙知である。ショーンの「行為の中の知（Knowing-in-action）」は、ポランニーの暗黙知のことであり、デューイの「探求」の中には、この知の形は登場しない。

ポランニーは、「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」<sup>30)</sup>とする暗黙知の提唱者として知られる。この暗黙知は、知全体にとって不可欠の要素であり、「暗黙的認



識をことごとく排除して、全ての知識を形式化しようとしても、そんな試みは自滅するしかない」<sup>31)</sup>とポランニーは述べる。一方、武谷は、技術は、言葉にできる形式的な知としての技術のみで成り立っているのではなく、必ず言葉にするのが困難な「主観的個人的」な技能を伴っているとする。武谷技術論の中の技能は、ポランニーの暗黙知とほぼ重なる概念として規定されている。

武谷の技術論は、1940年代に登場し、ポランニーの暗黙知は、1960年代に論文となっている。そして、1980年代には、ショーンの「The Reflective Practitioner」が出版される。武谷技術論の技術の概念は、「暗黙知」「行為の中の知」として深化していったと考えることもできるだろう。技能は、主観的個人的な知であり、言葉による伝達は困難である。熟練によって取得しなければならない。言葉によって伝えることができる技術。それがかなわない技能。両者は、一定の技術には、一定の技能が存在しているといった関係である。実践は、技術と技能の統一を通してなされる。その際、主観的な技能は客観的な技術の中に解消されるが、技能は消失するのではなく、新たな技術には新たな技能が必要とされる。このように武谷は技術と技能の関係について論を展開している。ショーンの「行為の中の知＝暗黙知」は、武谷技術論の技術規定に含まれる技能的な知に相当する。

## V. 暗黙知と形式知

1980年代初頭、西洋企業の多くは、活力をなくし、競争力を失い始めた。これは、科学的・計量的アプローチに頼り過ぎた経営戦略が要因であったという<sup>32)</sup>。ショーンのいう「技術的合理性モデル」の限界が露わになってきたのである。そこに登場したのが、野中らの「組織的知識創造理論」である。日本企業のケーススタディからこの理論は、導き出されている。野中らは、ポランニーに依拠して知識を「形式知 (explicit knowledge)」と「暗黙知 (tacit knowledge)」の二つに分ける。形式知は、言葉や数字で表すことができる知識である。一方、暗黙知は個人的な知であり、ノウハウとか技能といった技術的側面のみでなく、世界観、信念、ものの見方といった認知的側面も含んだ知である<sup>33)</sup>。

この二つの知は、企業組織のなかの相互作用によって起きる「知識変換 (knowledge conversion)」を通して、豊かになり有用なものになっていく。知識変換には、暗黙知から暗黙知へ (共同化)、暗黙知から形式知へ (表出化)、形式知から形式知へ (連結化)、形式知から暗黙知 (内面化) へという4つのモードがある<sup>34)</sup>。

「共同化」は、暗黙知を言葉によらず、経験の共有で技能をその組織のメンバーに伝え、伝わることで、共有することである。「表出化」は、暗黙知をメタファー、コンセプト、仮説、モデルなどのプロセスを経ながら、言語で表現できる形式知にすることを指す。連結化は、異なる形式知どうしを組み合わせることで新たな形式知を生み出すことをいう。内面化は、形式知を暗

黙知へと変換することをいうが、これは文字化されたことを追体験することによる学びとか、ある人の生き方を自分の心に取り入れるような知識の変換である。

野中らは、この4つの知識変換モードを次々とたどることによって知識の内容は相互作用を繰り返すとする。知識創造のスパイラルである。武谷も、技術（形式知）と技能（暗黙知）の関係を以下のように循環するものと考えている。

「技術の立場というものは常に、主観的個人的な技能を、客観的な技術に解消して行く事にあります。しかし、解消される事によって技能が消失するものであるかというのに決してしからず、新たな技術には新たな技能が要求され、これがまた再度技術に解消されながら発展していく」<sup>35)</sup>

この考え方を核に、野中らによって緻密に展開されたのが、「組織的知識創造理論」であるとしても違和感はない。

## VI. 日本看護科学学会の看護技術の定義について

技術には技能が伴うし、暗黙知の伴わない形式知はないとするなら、技術を過不足なく定義するには、「技能」と技術の関係を明確にする必要がある。日本看護科学学会の、看護技術の定義における「（看護技術は）その時の状況（context）の中で創造的に提供される」との文言は、形式知に裏付けされた「技術」のみでは不確定要素に満ちた「状況の中で」の看護実践は困難であり、実践の只中に生成する知をも動員して「創造的に」なされると解釈できる。「技術的合理的」知識、客観的な形式知のみではなく、技能的知、暗黙知なども加わって看護実践はなされるとの意味合いが込められているのではないか。

問題は「根拠」である。日本看護科学学会の看護技術の定義には、「（看護技術は）目的と根拠をもって提供される」「根拠に基づく専門的知識は熟練・修練により獲得され伝達される」と2か所「根拠」という言葉がつかわれている。この「根拠」は、客観的な裏付けがあり、マニュアル化された形式知のことを指している。マニュアルを適用して「根拠をもって」看護が提供される場面は、確かにあるし、その看護状況において提供されたのが「看護技術」であるとの定義は誤謬とはいえないだろう。

しかし、不確実性、独自性、不安定さなどの困難な状況を抱え、「混乱しぬかるんだ低地（ショーン）」である臨床現場は、マニュアル化された「根拠」だけでは立ちいかない。「（看護技術が）その時の状況（context）の中で創造的に提供」されるのはそのためである。「根拠をもって提供」された場合にのみ看護技術という定義できるかもしれないが、技術は暗黙知的な「技能」を伴うとの観点からは、この定義は不十分さを免れえないのではないか。

もう一つ、「根拠に基づく専門的知識」が「熟練・修練により獲得され伝達される」との文言も疑問である。看護職の「専門的知識」の獲得は、文献等によるものと臨床実践を通しての

学びの2つに分けられる。「根拠に基づく専門的知識」は、「伝達される」知識とされているから形式知のことである。「根拠に基づく専門的知識」が形式知を指しているとすれば、講義を主体とする一般的な教育でも学ぶことはできるだろう。臨床での「熟練・修練」を通して学ぶのは、技能的なもの、暗黙知的な知識が主なのではないか。もちろん、暗黙知⇒形式知、技能⇒技術の転換もあるので、臨床から学ぶ「根拠に基づく専門的知識」もありうるのだが。

以上述べたとおり、日本看護科学学会の看護技術の定義は、「根拠」という文言ひとつとっても「技術と技能」「形式知と暗黙知」「行為の中の知」といった観点から検討しなおさなければ整合性のある定義とはならないのではないかと思える。

## おわりに

看護系大学が240校を超え、看護師養成も大学教育にシフトしつつある。変遷していく看護基礎教育を背景に、臨床現場と看護教育の乖離が言われるようになって久しい。また、看護教育の大学化で看護学の確立が声だかにいわれるようになり、看護の学問・科学志向と現場・実践志向の対立も目立ちつつある。ショーンに倣っていえば、「技術的合理性モデル」に依拠した「堅い高地」と混沌とした状況で悪戦苦闘を強いられている「ぬかるんだ低地」の相克が露わになってきたといえるかもしれない。このような対立は看護職に特有なわけではない。職業専門職 (occupational profession)、あるいはマイナーな専門職といわれることもある福祉職、医療関連職、教員等の職種でも同様の状況を抱えているだろう<sup>36)</sup>。

川島の武谷技術論に依拠した看護技術論確立の構想は、ショーンの新たな専門家像、野中らの組織的知識創造理論などを取り込むことで新たな展望が見いだせるのではないか。この看護技術論の新たな展開には、技能(武谷)＝行為の中の知(ショーン)＝暗黙知(ポランニー、野中ら)に着目した臨床現場の知の復権が必要とされている。それは、「ぬかるんだ低地」での実践の中の知の意義を評価し、「技術的合理性」モデル優位の看護の現状を変えていく試みでもある。

## 文 献

- 1) 看護学を構成する重要な用語集：日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会 第9・10委員会 2011
- 2) Donald A. Schön (1983) / 柳沢昌一, 三輪健二訳 (2007)：省察的实践とは何か 鳳書房 2007
- 3) 野中郁次郎, 竹内弘高著, 梅本勝博訳：知識創造企業 東洋経済新報社 1996
- 4) 野中郁次郎, 紺野登：知識経営のすすめ－ナレッジマネジメントとその時代 ちくま新書 1999
- 5) 川島みどり：実践としての看護技術の発展の方途を探る 看護展望 vol.1 no2 27-30 1976
- 6) 川島みどり：看護の時代2 看護技術の現在 勁草書房 1994
- 7) 川島みどり：看護の時代3 看護の技術と教育 勁草書房 2002
- 8) 川嶋みどり：看護技術とは何か；技術論からの再考 臨床看護 臨時増刊号 vol.36 No12 1514-1519

2010

- 9) 川島みどり：看護技術とは何か―武谷技術論と看護 看護実践の科学 vol.40 No.9 61-76 2015
- 10) 川島みどり監修：実践看護技術学習支援テキスト 基礎看護学 17-22 日本看護協会出版会 2003
- 11) 武谷三男：技術論―迫害と戦いし知識人に捧ぐ― 著作集 1 弁証法の諸問題 勁草書房所収 125-141 1968
- 12) 7) 106
- 13) 野家敬一：科学哲学への招待 ちくま学芸文庫 220-228 2015
- 14) 11) 138-139
- 15) 武谷三男：科学・技術および人間 著作集 4 科学と技術 勁草書房所収 255 1969
- 16) 高橋照子編：看護テキスト NICE 看護学原論 100-108 2009
- 17) 日本看護技術学会 ホームページ <http://www.jsnas.jp/>
- 18) Philp K. Boch (1974) / 江淵一公訳：現代文化人類学入門（三）18 講談社学術文庫 1977
- 19) 13) 23-26
- 20) 大輪武司：テクノライフ選書 技術とは何か 4-22 オーム社 1997
- 21) 川島みどり：看護の「基礎」って何だろう？ ゆるがない「基礎」をつくるために看護教育 JAN. Vol.54 No1, 9-10, 2013
- 22) 2) はじめに ii
- 23) 2) 42
- 24) 2) 40
- 25) 2) 41
- 26) 2) 61
- 27) 2) 38-49
- 28) 武谷三男：自然の論理について 著作集 1 弁証法の諸問題 勁草書房所収 259 1968
- 29) Donald A.Schön : The thory of Inquiry: Dewey's Legcy to Educaion Curriculum Inquiry 22-2 119-139 1992
- 30) マイケル・ポランニー著, 高橋勇夫訳：暗黙知の次元 ちくま学芸文庫 18 2003
- 31) 28) 44
- 32) 3) 60
- 33) 3) 87-90
- 34) 3) 90-104
- 35) 11) 138
- 36) 進藤雄三／黒田浩一郎編 医療社会学を学ぶ人のために 世界思想社 42-59 1999

（よしはま ふみひろ 保健医療技術学部看護学科）